

Title	子ども虐待に対する保育士のアセスメントおよび関わりの傾向： 保育士経験年数の差異における比較
Author(s)	石原, あや; 鎌田, 佳奈美; 榎木野, 裕美; 橋本, 真紀; 高橋, 清子; 由里, 恭子
Editor(s)	
Citation	大阪府立看護大学医療技術短期大学部紀要. 2004, 9, p.9-18
Issue Date	2004-03-01
URL	http://hdl.handle.net/10466/2657
Rights	

原 著

子ども虐待に対する保育士のアセスメントおよび関わりの傾向
—保育士経験年数の差異における比較—

石原あや¹⁾, 鎌田佳奈美²⁾, 植木野裕美³⁾,
橋本真紀⁴⁾, 高橋清子⁵⁾, 由里恭子⁶⁾

(¹⁾大阪府立看護大学医療技術短期大学部看護学科, ²⁾大阪府立看護大学看護学部, ³⁾滋賀医科大学医学部看護学科,
⁴⁾聖和大学教育学部幼児教育学科, ⁵⁾大阪大学医学部保健学科, ⁶⁾元滋賀女子短期大学幼児教育保育学科)

Nursery Teachers' Assessment and Care with Abused or Neglected Children
—Differences Related to Nursery Teachers' Years of Experience—

Aya Ishihara¹⁾, Kanami Kamata²⁾, Hiromi Naragino³⁾,
Maki Hashimoto⁴⁾, Sayako Takahashi⁵⁾ and Kyoko Yuri⁶⁾

(¹⁾Department of Nursing, Osaka Prefecture College of Health Sciences, ²⁾Department of Nursing, Osaka Prefectural
College of Nursing, ³⁾Faculty of Nursing, Shiga University of Medical Science, ⁴⁾Division of Early Childhood
Education, Seiwa College, ⁵⁾Department of Nursing, School of Allied Health Sciences, Osaka University and
⁶⁾the former Department of Childcare and Preschool Education, Shiga Women's Junior College)

This study aimed to identify the trends of nursery teachers' assessment and care of abused or neglected children. Questionnaires were given to 599 nursery teachers. Almost all of them were interested in child abuse and neglect. Nursery teachers thought that observation of the following points was important: physical injury, status of attendance, and the attitude of the parents to the child. However, few thought that observation of growth situation and the child's physical conditions was as important. Nursery teachers with many years of experience observed personal relations of abused children and their parents more carefully than other teachers. The support for abused children or their parents was non-judgemental irrespective of nursery teachers' years of experience.

Key words: abused or neglected children, nursery teachers, assessment and care, years of experience

はじめに

現代社会は、少子化、核家族化の定着、近隣との交流の希薄化などの社会状況の変化により、わが子を持って初めて子どもや育児に関わる親が大半を占めている。慣れない育児への不安や孤立感の増大、さらに子ども虐待の増加まで、育児を取り巻く問題は深刻化の一途を辿っている。今や育児はその家庭だけで担うものではなく、社会全体で、子どもに関わる全ての専門職が協働して取り組むべきであるとの認識が浸透してきている¹⁾。

子ども虐待に関しては、平成12年に児童虐待防止法が施行されて以来、全国的にその発生予防、早期発見、早期対応、保護、支援について、さまざまな取り組みが行

われ、その成果や課題の見直しが進められている。小林ら²⁾が平成13年に実施した児童虐待全国実態調査によると、毎年3万5千件の新たな児童虐待の発生が推定され、全体の7割は虐待者のもとでの在宅養育が継続されていることが報告されている。そのような現状で、保育園は被虐待児およびその親への在宅援助を考えていく際に、最も身近で重要な機関の1つとして注目されている^{3, 4)}。例えば子どもには、安全の確保、発育・発達を保障を、親には、育児の負担軽減、育児行動の学習の場の提供、さらには虐待する親の多くが何らかの被虐待体験を有していることで抱えている心の問題へのケアなどがあげられる。一般的に、被虐待児やその親がとる態度や行動の由来に対する理解がなければ、彼らの行動を虐待環境のなかでの適応行動とみる視点が乏しくなる⁵⁾。彼らの行動を単に問題行動ととらえてしまえば、彼らの心を癒し、

安心感をもたらす関わりにはなり得ない。これまでの保育園を対象とした研究においては、1機関のみで対応の困難な事例への機関連携のあり方、その場合の保育園に期待される役割についてなどに焦点があてられたものが多い^{6,7)}。しかし、直接子どもや親に関わる保育士を対象とした研究は少なく、実際事例に遭遇した場合、子ども・親への対応に戸惑いが生じているのが実状である^{8,9)}。

以上のような点から、この研究では、実際の保育現場で虐待やその疑いのある子どもや親に関わる保育士が、子ども虐待についてどのようなアセスメントの視点や子どもへの関わり傾向を有しているのかを、保育士の経験年数の差異に焦点をあて、明らかにすることを目的とした。

1. 研究方法

本研究は、保育士の子ども虐待のアセスメントと彼らへの関わり傾向を広く探るため、量的記述的研究とした。

1. 調査対象者

某都道府県の民間保育園に勤務する保育士1530名である。保育園の現在の状況をありのままに把握するため、子どもの保育に直接携わっている保育士を対象とした。

2. 調査方法および調査期間

某都道府県社会福祉協議会を通じ、そこが管轄する全ての民間保育園306か所に質問紙を配布した。特に回答者を指定せずに、1施設につき5部ずつ合計1530部を配布し、郵送にて回収した。599名から回答が得られ、有効回収率は39.2%であった。調査期間は、2002年5月から6月である。

3. 倫理的配慮

質問紙の配布時に、調査の趣旨とともに、調査への協力は拒否できること、得られたデータは統計的に処理するため、個人は特定されないことを説明する文書を添付し、協力を依頼した。同意が得られた場合、各個人が返送できるようにした。

4. 調査内容

調査内容は、先行文献を参考にし、対象者の属性、子ども虐待に対する関心、被虐待児やその疑いのある子どもや親に対する観察、および関わり状況についてとした。各調査項目は、研究者間で一致をみるまで検討することで妥当性を確保した。これらについて、被虐待児に関わった経験のあるものには実際の関わりを、関わった経験のないものには、どのような関わりが良いかの観点

から回答を求めた。被虐待児やその親の観察については、「他の児より気にする」、「他の児と同じ程度気にする」、「その他」の選択肢より回答を求めた。また関わりについては、各状況に対して考えられる対応および「その他」の選択肢より回答を求めた。

5. 分析方法

結果は、保育士経験年数(5年以下、6~11年、12年以上)の間で、 χ^2 検定を行った。経験年数の区分は、保育者の熟達化プロセスを検討した高濱¹⁰⁾の分類を参考に設定した。なお統計学的検討には、統計ソフトSPSS Ver 11.0を用いた。

II. 結果

1. 対象者の属性

対象者の属性を表1に示した。

保育士の年齢は、全体では24歳以下が25.3%、25~29歳が24.7%と、20歳代が対象者の半数を占めていた。経験年数別にみると、5年以下の者が34.3%、6~11年の者が30.9%、12年以上の者が34.8%であった。

被虐待児に関与した経験がある者は全体の13.4%であった。経験年数で見ると、5年以下の者より12年以上の者の方が被虐待児に関わった経験が多かった($p<0.01$)。また、虐待の疑いのある子どもに関わった経験は、全体では約半数で、経験年数5年以下では、他の2群に比べて少なかった($p<0.001\sim p<0.01$)。

子ども虐待に関する知識は、多い順に「研修」、「マスコミ」、「保育系の学校」などから得ていた。経験年数が多いほど「研修」から、経験年数が少ないほど「保育系の学校」から知識を得ていた(すべて $p<0.001$)。

子ども虐待への関心の程度は、全体では「非常にある」が41.4%で、「ある」の48.3%、「少しある」の9.3%を加えると99.0%と、対象者のほぼ全数が子ども虐待に関心を示していた。経験年数の違いによる関心の程度の差は認められなかった。

2. 子ども虐待についての観察

被虐待児やその親を観察する際、「他の児より気にする」とした回答を表2に示した。

「1. 身体の傷」、「2. 登園状況」、「3. 子どもへの親の態度」などの、安全面や親と子が直接関わっている場面については、経験年数にかかわらず大半の者が、他児より注意深い観察を行っていた。一方、「4. 子どもの体調」、「5. 発育状態」などネグレクトとの関連が考えられる項目については、他児より気にするとした回答は、先に述べた安全面の観察に比べると、どの経験年数においても注

表1 対象者の属性

経験年数	5年以下 n=205	6～11年 n=185	12年以上 n=208	全体 n=598
年齢				
24歳以下	148(72.2)	3(1.6)	0(0.0)	151(25.3)
25～29歳	42(20.5)	103(55.7)	3(1.4)	148(24.7)
30～34歳	6(2.9)	54(29.2)	38(18.3)	98(16.4)
35～39歳	2(1.0)	6(3.2)	54(26.0)	62(10.4)
40歳以上	6(2.9)	19(10.3)	113(54.3)	138(23.1)
無回答	1(0.5)	0(0.0)	0(0.0)	1(0.1)
被虐待児に関与した経験				
あり	18(8.8)	26(14.1)	36(17.3)	80(13.4)
なし	187(91.2)	158(85.4)	171(82.2)	516(86.3)
無回答	0(0.0)	1(0.5)	1(0.5)	2(0.3)
虐待の疑いのある子どもに関与した経験				
あり	76(37.0)	96(51.9)	123(59.1)	295(49.3)
なし	125(61.0)	85(45.9)	81(39.0)	291(48.7)
無回答	4(2.0)	4(2.2)	4(1.9)	12(2.0)
子ども虐待に関する知識を得たところ(複数回答)				
研修	60(29.3)	103(55.7)	150(72.1)	313(52.3)
マスコミ	69(33.7)	88(47.6)	117(56.3)	274(45.8)
保育系の学校	140(68.3)	47(25.4)	6(2.9)	193(32.3)
講演会	14(6.8)	19(10.3)	53(25.5)	86(14.4)
勉強会	4(2.0)	16(8.6)	21(10.1)	41(6.7)

()は%, ** p<0.01, *** p<0.001

表2 子ども虐待に関する観察

観察項目	経験年数		
	5年以下 n=205	6～11年 n=185	12年以上 n=208
1. 身体の傷	193(94.1)	180(97.3)	195(93.8)
2. 登園状況	180(87.8)	174(94.1)	191(91.8)
3. 子どもへの親の態度	189(92.2)	175(94.6)	192(92.3)
4. 子どもの体調	167(81.5)	162(87.6)	182(87.5)
5. 発育状態	153(74.6)	152(82.2)	168(80.8)
6. 大人への態度	149(72.7)	147(79.5)	163(78.4)
7. 他児への態度	134(65.4)	136(73.5)	161(77.4)
8. 遊んでいる様子	132(64.4)	142(76.8)	161(77.4)
9. 保育士や他児の親に対する親の態度	132(64.4)	141(76.2)	162(77.9)

注) 子ども虐待に関する観察で、「他児より気にする」とした回答を記載
()は%, * p<0.05, ** p<0.01

目する割合がやや低くなっていた。子どもや親の対人関係のとり方(項目6, 7, 8, 9)については、他児より気にするとした回答はさらに低くなる傾向にあった。

また、経験年数の違いによる差がいくつかの項目で認められた。子どもの観察においては、「7. 他児への態度」、
「8. 遊んでいる様子」の2項目において、経験年数5年以下より12年以上の者が他児より気にするとした回答が多かった(ともにp<0.01)。親の観察では、「9. 保育士や他児の親に対する親の態度」で、経験年数5年以下より他児の2群の方が他児より気にするとした回答が多かった(p<0.01～p<0.05)。

3. 被虐待児への関わり

1) 問題行動への関わり

保育士が被虐待児の問題と思われる行動に対して、どのような関わりをしているか、またはどのような関わりが適切と考えるかを表3に示した。

「1. 全ての大人に甘えを示す時」の関わりは、大半が「甘えを受け止める」と受容的なものであったが、より積極的な「意図的にしっかり甘えさせる」という回答は23.8～25.0%であった。また「2. 食べたいのに食べよう

表3 問題行動への関わり

項目	経験年数		
	5年以下 n=205	6～11年 n=185	12年以上 n=208
1. 全ての大人に甘えを示す時			
・甘えを受け止める	126 (61.5)	111 (60.0)	131 (61.5)
・意図的にしっかり甘えさせる	51 (24.6)	44 (23.8)	52 (25.0)
・意図的にある程度距離をおく	11 (5.4)	12 (6.5)	31 (5.2)
・その他	6 (2.9)	6 (3.2)	12 (2.0)
・無回答	11 (5.4)	12 (6.5)	40 (6.7)
2. 食べたいのに食べようとしないう時			
・食べるように言葉で促す	94 (45.9)	77 (41.6)	77 (37.0)
・安心させるため抱いて食べさせる	75 (36.6)	66 (35.7)	74 (35.6)
・安心させるためその場を離れる	9 (4.4)	9 (4.9)	6 (2.9)
・その他	12 (5.9)	15 (8.1)	12 (5.8)
・無回答	15 (7.3)	18 (9.7)	39 (18.8)
3. 無表情で周囲を凝視している時			
・できるだけスキンシップをもつ	125 (61.0)	105 (56.8)	133 (63.9)
・積極的に刺激し活動を引き出す	57 (27.8)	52 (28.1)	41 (19.7)
・そっとしておく	16 (7.8)	11 (5.8)	12 (5.8)
・その他	3 (1.5)	2 (1.1)	6 (2.9)
・無回答	4 (2.0)	15 (8.1)	16 (7.7)
4. 攻撃的な行動を示す時			
・行動を静止し、悪い行動であることを伝える	69 (33.7)	58 (31.4)	50 (24.0)
・落ち着いたのを待って話す	43 (21.0)	32 (17.3)	40 (19.2)
・抱きかかえ、子どもの気持ちを理解していることを話す	72 (35.1)	79 (42.7)	101 (48.6)
・その他	8 (3.9)	2 (1.1)	3 (1.4)
・無回答	13 (6.3)	14 (7.6)	14 (6.7)
5. 怪我をしても助けを求めない時			
・泣かなかったことを褒める	51 (24.9)	49 (26.5)	30 (14.4)
・泣いても良いことを話す	120 (58.5)	94 (50.8)	142 (68.3)
・そのままにしておく	4 (2.0)	5 (2.7)	2 (1.0)
・その他	15 (7.3)	25 (13.5)	12 (5.8)
・無回答	15 (7.3)	12 (6.5)	22 (10.6)
6. 自分は「悪い子」だと思っている時			
・子どもが悪くないことを伝える	24 (11.7)	13 (7.0)	40 (19.2)
・特技や長所を褒め自信を持たす	165 (80.5)	162 (87.6)	147 (70.7)
・他の子どもの遊びの中に入れる	1 (0.5)	2 (1.1)	1 (0.5)
・その他	3 (1.5)	4 (2.2)	3 (1.4)
・無回答	12 (5.9)	4 (2.2)	17 (8.2)
7. 不自然な傷がある時			
・子どもに傷の原因を聞く	169 (82.4)	148 (80.0)	131 (63.0)
・子ども自身から話すのを待つ	23 (11.2)	24 (13.0)	47 (22.6)
・そのままにしておく	3 (1.5)	0 (0.0)	4 (1.9)
・その他	6 (2.9)	6 (3.2)	12 (5.8)
・無回答	4 (2.0)	7 (3.8)	14 (6.7)

() は%, * p<0.05, ** p<0.01, *** p<0.001

としないう時」の関わりは、子どもが警戒心や恐怖感のために自らの行動を抑制しているという理解に基づき、「その場を離れる」としたものは2.9～4.9%であった。同じく「3. 無表情で周囲を凝視している時」の関わりも、「できるだけスキンシップをもつ」ことで安心感を与える関わりが最も多いものの、逆効果となる「積極的に活動を引き出す」関わりも19.7～28.1%あった。さらに、「4. 攻撃的な行動を示す時」、すなわち自分の行動がどこまで許されるのかをみる「試し行動」については、「子どもの気持ちを理解していることを話す」関わりがやや多いもの

の、「行動を制止する」関わりにも対応が分かれていた。以上の4項目については、経験年数の違いによる差は認められなかった。

「5. 怪我をしても助けを求めない時」に、「泣いてもよいと話す」と、子どもの感情表出を引き出す関わりをしている割合は、他の2群に比べて経験年数12年以上の者に多かった(ともに p<0.001)。

「6. 自分は悪い子だと思っている時」に、「子どもの良さを認め自信を持たせる」関わりをしているのは、経験年数が12年以上の者より、5年以下(p<0.05)、6～11年

表4 発達の遅れ・歪みへの関わり

項 目	経 験 年 数		
	5年以下 n=205	6~11年 n=185	12年以上 n=208
1. 基本的な生活習慣が未確立の時			
・習慣づけるよう教える	151(73.7)	136(73.5)	150(72.1)
・モデルを示す	39(19.0)	38(20.5)	43(20.7)
・そのままにしておく	1(0.5)	0(0.0)	0(0.0)
・その他	9(4.4)	4(2.2)	3(1.4)
・無回答	5(2.4)	7(3.8)	12(5.8)
2. 集団のルールが守れない時			
・ルールを教える	125(61.0)	120(64.9)	131(63.0)
・モデルを示す	65(31.7)	54(29.2)	62(29.8)
・そのままにしておく	0(0.0)	1(0.5)	0(0.0)
・その他	7(3.4)	2(1.1)	1(0.5)
・無回答	8(3.9)	8(4.3)	14(6.7)
3. 言葉の遅れがある時			
・生活空間を広げる	70(34.1)	55(29.7)	71(34.1)
・できるだけ言葉を教える	27(13.2)	31(16.8)	27(13.0)
・同年代の子どもと遊ばせる	79(38.5)	62(33.5)	76(36.5)
・その他	14(6.8)	22(11.9)	13(6.3)
・無回答	15(7.3)	15(8.1)	21(10.1)
4. 遊び方を知らない時			
・保育士と子どもが遊んでいる中に 他の子どもを入れて遊ぶ	88(42.9)	90(48.6)	92(44.2)
・他の子どもが遊んでいるところに 連れて行く	6(2.9)	4(2.2)	2(1.0)
・他の子どもがいるところに 連れて行き一緒に遊ぶ	101(49.3)	81(43.8)	93(44.7)
・その他	5(2.4)	5(2.7)	7(3.4)
・無回答	5(2.4)	5(2.7)	14(6.7)

() は%

($p<0.001$) の者に多かった。

「7. 不自然な傷」については、子どものストレスを高めかねない「傷の原因を聞く」関わりは、経験年数が少ないほど多かった ($p<0.001$)。

2) 発達の遅れ・歪みへの関わり

不適切な養育ゆえの子どもの発達の遅れや歪みへの関わりについては、表4に示した。

「1. 生活習慣が身に付いていない」、「2. 集団のルールが守れない」など、生活体験の不足による影響については、それぞれについて教えるという指導的な関わりが多かった。日々の保育のなかで意図的に「モデルを示す」関わりは、19.0~31.7%であった。同様に「3. 言葉の遅れ」についても、「生活空間を広げる」としたものは29.7~34.1%で、通常の場合言葉の獲得に有効とされる「同年代の子どもと遊ばせる」対応と二分されていた。

「4. 遊び方を知らない時」の他児との関係のとらせ方については、まずは保育士との関係をもとに「他児を入れる」という関わりが42.9~48.6%あるものの、「他児が遊んでいるところに連れて行く」という対応と同程度で

あった。

これら発達の遅れ、歪みに対する関わりについては、経験年数の違いによる差は認められなかった。

4. 親への関わり

1) 親の態度・行動の理解

虐待者である親の態度・行動の理解について表5に示した。

「1. 従順な態度は自信のなさの表れである」について、「非常にそう思う」と理解をしている者は3.2~4.8%と少なく、「わからない」とした回答も26.9~34.6%あった。「2. 子どもの様子を知らたがらない場合」は、保育士の大半が「子どもの良いところを伝える」としていた。親の思いに共感し、「子どもの扱いにくさを認める」関わりは、経験年数に関わらず0.5~2.0%と非常に少なかった。

「3. 子どもへの接し方が事務的な場合」は、69.2~74.6%が「モデルを示す」関わりを行っていた。以上の項目1, 2, 3については、経験年数の違いによる差は認められなかった。

「4. 親の言動の矛盾」については、43.2~49.8%が

表5 親の態度・行動の理解

項目	経験年数		
	5年以下 n=205	6～11年 n=185	12年以上 n=208
1. 従順な態度は自信のなさの表れである			
・非常にそう思う	9 (4.4)	6 (3.2)	10 (4.8)
・少し思う	65 (31.7)	68 (36.8)	69 (33.2)
・思わない	56 (27.3)	43 (23.2)	60 (28.8)
・わからない	71 (34.6)	59 (31.9)	56 (26.9)
・無回答	4 (2.0)	9 (4.9)	13 (6.3)
2. 保育園での子どもの様子を知らたがらない場合			
・子どもの良いところを伝える	186 (90.7)	170 (91.9)	185 (88.9)
・子どもの扱いにくさを認める	4 (2.0)	2 (1.1)	1 (0.5)
・積極的には関わりを持たないようにする	1 (0.5)	1 (0.5)	5 (2.4)
・その他	14 (6.8)	11 (5.9)	9 (4.3)
・無回答	0 (0.0)	1 (0.5)	8 (3.8)
3. 子どもへの接し方が事務的な場合			
・接し方を言葉で説明する	23 (11.2)	31 (16.8)	31 (14.9)
・モデルを示す	153 (74.6)	136 (73.5)	144 (69.2)
・直接親に働きかけない	4 (6.8)	8 (4.3)	16 (7.7)
・その他	9 (4.4)	4 (2.2)	7 (3.4)
・無回答	6 (2.9)	6 (3.2)	10 (4.8)
4. 親の言動が矛盾している場合			
・矛盾していることを説明する	51 (24.9)	57 (30.8)	61 (29.3)
・そのまま受け止める	102 (49.8)	80 (43.2)	94 (45.2)
・黙認する	34 (16.6)	15 (8.1)	20 (9.6)
・その他	9 (4.4)	16 (8.6)	13 (6.3)
・無回答	9 (4.4)	17 (9.2)	20 (9.6)

() は%, * $p<0.05$

「そのまま受け止める」と受容的な関わりをしていた。「黙認する」とした回答は、他の2群に比べて経験年数が5年以下の者に多かった(ともに $p<0.05$)。

2) 親への関わり

保育士が、虐待やその疑いのある親にどのように関わっているかを表6に示した。

保育園で、虐待事例への在宅援助を継続させるためには、子どもが毎日登園してくることが不可欠である。「1. 無断欠席が多い場合」は、「登園を促す」と「親の話をよく聴く」に対応が二分されており、経験年数の違いによる差もなかった。

「2. 忘れ物が多い場合」は、経験年数12年以上の者が、他の2群に比べて、「子どもの登園を優先し要求しない」という関わりをする割合が高くなっていた($p<0.001$ ～ $p<0.01$)。

また、「3. 子どもに医療を受けさせない場合」は、いずれの経験年数においても受診を勧める関わりが最も多かったものの、経験年数12年以上では、5年以下に比べて、「他の名目で園から医療を受けさせる」とした回答が増え

ていた($p<0.05$)。

「4. 子どもの不自然な怪我」、「5. 虐待していることを打ち明けられた場合」については、親を受容するという関わりが経験年数にかかわらず最も多かった。

「6. 虐待していることを聞いた時の対応」については、「通告の判断を上司に委ねる」としたものが、経験年数12年以上に比べ、5年以下の者に多かった($p<0.05$)。「児童相談所等に通告する」とした回答は、経験年数の違いによる差はなかった。

III. 考 察

保育士が子ども虐待について、どのようなアセスメントや関わり傾向を有しているかを、保育士の経験年数の差異に焦点をあてて分析した。

1. 保育士の子ども虐待に対するアセスメントの傾向

今回、保育士が子ども虐待のアセスメントの視点として最も重視していたのは、経験年数にかかわらず「身体の傷」、「登園状況」、「子どもへの親の態度」といった子どもの安全に関する項目であった。子ども虐待対応の手

表6 親への関わり

項目	経 験 年 数		
	5年以下 n=205	6～11年 n=185	12年以上 n=208
1. 無断欠席が多い場合			
・ 毎日登園するよう積極的に働きかける	71 (34.6)	95 (51.4)	99 (47.6)
・ 登園は促さないが親の話をよく聴く	113 (55.1)	76 (41.1)	89 (42.8)
・ 直接親には働きかけない	4 (2.0)	3 (1.6)	3 (1.4)
・ その他	6 (2.9)	6 (3.2)	8 (3.8)
・ 無回答	11 (5.4)	5 (2.7)	9 (4.3)
2. 忘れ物が多い場合			
・ 忘れ物を持ってくるまで要求する	98 (47.8)	100 (54.1)	71 (34.1)
・ 子どもが登園していることを優先し要求しない	64 (31.2)	53 (28.6)	96 (46.2)
・ 黙認する	5 (2.4)	3 (1.6)	3 (1.4)
・ その他	28 (13.7)	21 (11.4)	22 (10.6)
・ 無回答	10 (4.9)	8 (4.3)	16 (7.7)
3. 子どもに医療を受けさせない場合			
・ すぐに医療を受けるよう勧める	153 (74.6)	133 (71.9)	133 (63.9)
・ 他の理由を名目に園から医療を受けさせる	24 (11.7)	28 (15.1)	43 (20.7)
・ 園からは受診を指示しない	12 (5.9)	9 (4.9)	43 (20.7)
・ その他	8 (3.9)	6 (3.2)	15 (7.2)
・ 無回答	8 (3.9)	9 (4.9)	13 (6.3)
4. 子どもが不自然な怪我をしてきた場合			
・ 親に事実を確認し、疑わしい時はさらに尋ねる	49 (23.9)	48 (25.9)	55 (26.4)
・ 親の言うことをとりあえず受け止める	139 (67.8)	123 (66.5)	126 (60.6)
・ 直接親に働きかけない	8 (3.9)	5 (2.7)	11 (5.3)
・ その他	6 (2.9)	6 (3.2)	8 (3.8)
・ 無回答	3 (1.5)	3 (1.6)	8 (3.8)
5. 親に虐待していることを打ち明けられた時			
・ 親に話を聴き、事実確認をする	49 (23.9)	40 (21.6)	41 (19.7)
・ 親に養育態度を助言する	12 (5.9)	10 (5.4)	13 (6.3)
・ 話をよく聴き親を受け止める	129 (62.9)	123 (66.5)	142 (68.3)
・ その他	1 (0.5)	2 (1.1)	2 (1.0)
・ 無回答	14 (6.8)	10 (5.4)	10 (4.8)
6. 親から虐待していることを聞いた時の対応			
・ 反省しているととらえ、上司には相談しない	0 (0.0)	2 (1.1)	0 (0.0)
・ 上司に相談するが、通告するか否かは上司の判断に委ねる	159 (77.6)	135 (73.0)	140 (67.3)
・ すぐに上司に相談し、児童相談所等に通告する	38 (18.5)	47 (25.4)	55 (26.4)
・ その他	2 (1.0)	0 (0.0)	5 (2.4)
・ 無回答	6 (2.9)	1 (0.5)	8 (3.8)

() は%、* p<0.05, ** p<0.01, *** p<0.001

引き¹¹⁾には、乳幼児を在宅のまま援助する場合、保育所等子どもが毎日通う場所の確保は最低限満たす条件の1つと明示されている。これにより、少なくとも日中の子どもの安全は確保され、親と子が家庭に引きこもって、密室の中で虐待が重症化していくという最も懸念される事態の予防、早期発見につながる¹²⁾。これらの重要性は、保育士に十分認識されているといえる。

一方、ネグレクトに関する項目については、アセスメントの視点とする認識がやや低くなる傾向があった。「子どもの体調」や「発育状態」は、単に他の園児同様保育を行ううえで必要な健康観察としてだけでなく、心身ともに不安定な生活を強いられ、家庭での十分な世話が受

けられていない状況を反映している¹³⁾との理解が必要であろう。

また対人関係に関する項目についても、アセスメントの視点として重視する割合がやや低くなっていた。しかし経験年数の多い保育士は、5年以下の者より、「他児への態度」、「遊んでいる様子」、「保育士や他児の親に対する親の態度」などといった被虐待児やその親の対人関係のとり方について、より注意深い観察を行っているという違いが認められた。被虐待児やその親は他人や自分自身に対してまでも、不安や不信の感覚を発達させているために、過度の警戒や攻撃性、愛着形成障害など、さまざまな情緒の問題を抱えていることが多い⁵⁾。これらは、

子ども同士あるいは保育士や他の親との関わりの中となる保育園の生活のなかでこそみえてくるものである。伊庭らは、看護職と保育職を対象に子ども虐待に対する意識調査を行い、保育職は日常の生活場面を多くみていることから、子どもの生活行動に関することに対して、虐待に気づきやすいと述べている¹⁴⁾。今回の調査においても、保育士は子どもの保育園での生活全般についてよく観察しているように思われる。

2. 被虐待児への関わり傾向

子どもへの関わりは、保育士の経験年数にかかわらず受容的な対応を基本としていた。しかし、被虐待児であるがゆえに受容的であるというよりも、他の園児への関わりと変わらないように思われた。保育所保育指針¹⁵⁾にも明示されているように、受容的な関わりは元来保育士のあるべき態度として重視されているものである。ただ被虐待児の場合、無差別的な愛着や攻撃性、警戒心の高さ、低い自己評価など、さまざまな問題行動を示す場合が多い。このような行動は、虐待環境への適応行動であるとの理解がなければ、他の園児と同様の受容的対応では、彼らの依存や安全のニーズに沿った関わりにはならない^{16, 17)}。とくに顕著だったのは、食べたいのに食べようとしない時の対応である。これは過度の不安や警戒心のため行動が抑制されているからで、「安心させるためその場を離れる」ことが望まれるが、この回答は非常に少なかった。同様に、全ての大人への甘え、無表情、攻撃的態度なども、不安に由来していることを理解し、より意図的に子どもを受容する関わりが必要であろう。

また、経験年数にかかわらず、生活習慣、集団のルール、言葉、遊び方などは、それぞれについて教えるといった、指導的な関わりが多かった。これらの項目は、被虐待児がそれまでの親との関係のなかで、しつけと称されて虐待行為を引き起こすきっかけとなってきたことが考えられるものである¹⁸⁾。その方法について教えるという関わりは、ともすれば虐待者と同じ関わりになってしまう危険性があると思われる。子どもの意欲を引き出し、発達を促進するためには、保育士との1対1の信頼関係を基盤に、子どものモデルとなって、生活体験を増やしていくという視点も重要であろう¹⁷⁾。

3. 親への関わり傾向

虐待する親に共通する心理的特性に対する理解は、経験年数にかかわらず、若干不十分な点が認められた。例えば、「従順な態度」について、これが自信のなさの表れであるという理解は、非常に少なかった。また「保育園での子どもの様子を知りたがらない場合」、子どもの

良いところを伝える関わりが圧倒的に多かった。しかし、このような理解は、親のニードとは全く相反するものである。つまり、親自身も他人や自分自身に対する不信の感情を発達させている場合が多いという理解が必要である^{19, 20)}。子どもの扱いにくさ、親のしんどさを認めるところからスタートしなければ、親にとっては逆にそれまでの育児を否定され、さらなる自信の喪失につながりかねないという認識が必要であろう。

親への関わりについては、子どもへの関わりと同様、基本的には受容的なものであった。また「親の言動の矛盾」や「忘れ物」、「医療」などに関しては、経験年数の多い者が形式にとらわれず、柔軟に対応しようとする傾向にあった。今回の対象者は、経験年数が多くなるほど、被虐待児やその疑いのある子どもに関与した経験や、虐待に関する研修や講演会に参加した経験を持つ者が増えていた。Benner²⁰⁾は、「経験」とは現実の多くの実践状況に出会って、あらかじめもっている概念や理論を洗練することと意味づけている。また保育者の熟達化プロセスを検討した高濱¹⁰⁾によれば、保育者としての知識が一定量になるには5年程度が必要で、問題解決にあたっては、知識の構造化すなわち、知識を相互に結びつけて多面的に考慮することが必要だとしている。経験年数の多い者が、「忘れ物」や「医療」などに、柔軟な対応をする傾向があったり、子どもや親のとらえ方の視点に幅があるのは、過去の経験を相互に関連させて、「何かおかしい」、「こうした方がいい」と認識する能力を向上させているからかもしれない。さらに、虐待する親へのケアとして発展させていくためには、より意図的にどのような親であっても、「よい親」として対応し、「本当に助ける価値のある人」として、具体的に役に立つ援助を行うことが、彼らの適切なペアレンティングの獲得につながる²¹⁾と認識を深めていくことが必要であろう。

また、親から虐待していることを聞いた時の関連機関への通告については、その必要性の理解はしているものの、判断を下すにあたっては上司に委ねる者が多かった。これは小山ら⁸⁾の、保育者の虐待に対する意識は、個人のスキルアップないし園内での対応や連携に向けられており、園外の連携については意識は低くないもののそれほど行われていないという調査結果と同様である。今回、経験年数の少ない者にその傾向が強かったが、1つの組織に所属する職員としては、上司に相談し、個人の判断で行動することが少なくなるのは当然かもしれない。また、推測の域は出ないが、子どもや親と日常的に関わっているがゆえに、その関係への影響が危惧される判断に

戸惑いが生じることも考えられる。虐待への対応は、1つの機関で担えるものではなく、各専門職が異なる視点からアセスメントすることで、より虐待を包括的にとらえることが可能になる²³⁾。関連機関への通告は、決して親への裏切り行為ではなく、虐待への援助につながるという認識の転換も必要であろう。

おわりに

子ども虐待を在宅のまま援助する際、重要な存在となる保育園の保育士が、被虐待児やその親に対してどのようなアセスメントや関わりの傾向を持っているのかを明らかにするために実態調査を行った。保育士の経験年数に焦点をあてて分析を行い、以下の結果が得られた。

1. 保育士のほぼ全数が、子ども虐待に関心を持っており、経験年数の違いによる差も認められなかった。
2. 子ども虐待についての観察では、経験年数にかかわらず、「身体の傷」、「登園状況」、「子どもへの親の態度」などを重視しており、「発育状態」、「子どもの体調」などの観察の程度はやや低くなっていた。
3. 被虐待児やその親の対人関係の取り方については、経験年数12年以上の者がより観察を重視していた。
4. 被虐待児やその親への関わりは、経験年数にかかわらず受容的であった。

今後これらの結果を生かして、異職種間の連携が必要な子ども虐待の在宅援助、育児に不安を持つ親への援助方法を検討していきたいと考える。

謝辞

本研究にあたり、ご協力いただきました保育園、保育士のみなさま、社会福祉協議会のみなさまに感謝致します。

また、この研究は平成14年度大阪府立看護大学医療技術短期大学部学長指定研究補助金を受けて行いました。

文献

- 1) 森田明美 (2000) 子育ての社会化—今、これから—。子ども家庭福祉情報, 16:50-54.
- 2) 小林登 (2002) 児童虐待全国実態調査—1. 虐待発生と対応の実態—。子どもの虐待とネグレクト, 4:276-302.
- 3) 浅井春夫 (2000) 児童虐待防止法の成立と保育実践の課題。現代と保育, 52:16-43.
- 4) 柳川敏彦 (2000) 子どもの虐待における保育所の役割を考える。保育の友, 48 (13):11-16.
- 5) 西澤哲 (1994) “子どもの虐待”, 誠信書房, 東京.

- 6) 下泉秀夫 (2001) 児童虐待における保育所 (園) の役割と関係機関のネットワーク。子どもの虐待とネグレクト, 3:282-293.
- 7) 高橋重宏, 庄司順一, 中谷茂一, 山本真実, 奥山真紀子, 加部一彦他 (1997) 「子どもへの不適切な関わり (マルトリートメント)」のアセスメント基準とその社会的対応に関する研究 (3)—子ども虐待に関する多職種間のピネット調査の比較を中心に—。日本総合愛育研究所紀要, 33:127-141.
- 8) 小山修, 安治陽子 (2003) 保育所の虐待に対する認識と対応・連携に関する研究, 厚生労働科学研究費補助金 (子ども家庭総合研究事業) 分担研究報告書, p.423-432.
- 9) 林有香, 石川紀子, 伊庭久江, 中村伸枝, 小宮久子, 丸光恵, 内田雅代 (2003) 看護職・保育職が関わった子ども虐待ケースと援助の特徴。小児保健研究, 62:65-72.
- 10) 高濱裕子 (2001) “保育者としての成長プロセス—幼児との関係を視点とした長期的・短期的発達—”, 風間書房, 東京.
- 11) 厚生省 (2001) “子ども虐待対応の手引き” (日本子ども家庭総合研究所編), 有斐閣, 東京.
- 12) 千葉郁子 (2001) 地域における対応と支援の仕方 保育士の立場から; 保育所での母親・家族への支援。小児看護, 24:1812-1815.
- 13) 納谷保子 (1997) 虐待の種類と診断のポイント。小児看護, 20:860-864.
- 14) 伊庭久江, 石川紀子, 丸光恵, 林有香, 富岡晶子, 内田雅代 (2002) 子ども虐待に対する看護職の意識調査—保育職と比較して—。千葉大学看護学部紀要, 24:23-29.
- 15) 厚生省児童家庭局 (2000) 保育所保育指針 “保育白書” (全国保育団体連絡会・保育研究所編), 草土文化, 東京, p.134-168.
- 16) 植木野裕美 (1994) 被虐待児の身体的ケアと精神的ケア。小児看護, 17:1373-1376.
- 17) 植木野裕美 (2001) 虐待と外傷後ストレス症候群の看護ケア。小児看護, 24:870-873.
- 18) 猪股祥 (2000) 虐待をめぐって第一線レポート—早期発見・早期対応に向けて保育士—。母子保健情報, 42:135-138.
- 19) 正木公子 (1997) 子どもの虐待の予防とケアのための保育所の役割—虐待問題を通して考える親との関係づくり—。保育情報, 241:2-9.

- 20) 郭麗月 (1997) 被虐待児と親の行動特徴とその由来. 小児看護, 20:881-885.
- 21) Patricia Benner (1984) "From Novice to Expert: Excellence and Power in Clinical Nursing Practice", Addison-Wesley Publishing Company, Menlo Park. [井部俊子, 井村真澄, 上泉和子訳 (1992) "ベナー看護論-達人ナースの卓越性とパワー-", 医学書院, 東京, p.1-33.]
- 22) 鈴木敦子 (2001) 児童虐待における家族ケア-強迫観念の強い親と未熟な親への初期ケアに焦点をあてて-. 小児看護, 24:1782-1785.
- 23) 藤井東治, 渡辺好恵, 澁川悦子, 岡田久実子, 栗澤尚子, 大塚陽子, 藤塚千晴 (2003) 子ども虐待の「在宅ケア」にどう取り組むか?. 子ども虐待とネグレクト, 5:50-55.